

北星学園大学と私

三浦 結貴



奨励者紹介（みうら・ゆき）

北星学園大学 企画広報課

人間の心は自分の道を計画する。

主が一步一步を備えてくださる。

（箴言 一六章九節）

私は二〇二〇年度より北星学園の事務職員として勤務している企画広報課の三浦と申します。

開学六〇周年記念チャペルタイムでお話させていただくという貴重な機会をいただきありがとうございます。大学進学時はこちらで勤務させていただけるとは思ってもみなかったことでしたが、ご縁があり現在に至っております。本学が学び場としても職場としてもどれだけ温かい場所であるかお伝えできたらと思います。私個人の経験談で拙い話になってしまいかと思いますが、本日はよろしく願います。

まずは学び場としてです。私は、大学進学をきっかけに札幌でひとり暮らしを始めました。本学を受験したきっかけは祖母と見ていたよさこいソーランまつりのテレビ放送でした。二世帯で住んでいたためもし私が進学し、家を出たら寂しいと思ってくれていたよう

で、こんな風にテレビで様子を見ることができたら安心すると言ってくれました。そのことが私にとっては印象深く、たまたま見ていたテレビがきっかけとなって進学先を決めました。そこから学科を決めていきました。高校三年生の私は将来について明確な目標がありませんでした。そこで、今後目標ができた時のために幅広く学んでおきたいという理由から経済法学科に進学しました。初登校の日には女子の比率の少なさに驚き、自分の下調べの悪さに悲しくなりました。経済法学科は学科名のとおり経済系と法律系の授業を自由に履修することができ、自分の好きな分野について深めることができます。学科にはユーモアたっぷりの先生がたくさんいらっしゃったので、ゼミなど少人数授業も楽しく受講することができました。札幌市外からの進学な上にクラスが存在しない大学での友達作りに大きな不安を感じていましたが、学科の他にも共通科目の授業や所属していたサークルで学科外にも友達を作ることができました。地方出身で当時訛りのあった私でしたが、周りが話しかけてくれて仲良くなれました。所属していたサークルでは六月に目標としている大会があるため、四月から入部となる一年生は大忙しです。私も初の一人暮らしと重なり、とても忙しく充実した生活をしていました。慣れない生活で一年目は授業の直前に教室につくギリギリ生活を極めていました。サークルは就活に影響が少ない三年生まで続けまし

た。四年生は補助として多少参加しました。練習頻度が高いこともあるのか、年々半分の人が辞めていきました。一年生の頃は一二〇人いた同期が三年生では二〇人くらいでした。人前と運動が苦手な私が祖母との会話からふわっと入部したサークルは練習を楽しくしてくれた同期と学習面で支えてくれた学科の友達がいなくては成り立ちませんでした。大学を卒業して三年たった今でもサークルの本番が近い時期は練習で疲れて、ボロボロで通学していたことを笑われます。辛くて辞めたい、自分が練習の時に遊んでいる友達を羨ましいと思ったことはありませんが、周りの支えと逃げられない環境に諦めることで全力で大学生をすることができました。進学のきっかけである祖母と見ていたテレビに出られたり、札幌ドームで踊れたり、これまでの自分だとすることができなかった経験をすることができました。何気なく始めたことでもやり切ることで自分の糧にすることができると実感する機会になりました。

次に職場としてです。就職活動では就職支援課の方に大変お世話になり、ご縁をいただいて本学に勤務させていただくことになりました。コロナ禍での入職だったため、接する機会のない職員の方も多くいらっしゃいましたが、そんな中でも気を遣って話しかけてく

ださる方や、趣味を受け入れていただける温かい課の方々に恵まれ、業務が立て込んでいても癒しがたくさんある状況で仕事ができていることに幸せを感じております。

今回お話しする機会をいただいたことで、大学入学から今に至るまでの人生を振り返る機会となりました。なかなか勢いで大切なことを決めがちだったのかなと思います。記憶に新しいここ七年間は北星学園の方と関わってばかりです。これでなんとか生きてきたのは自分が何かをした、成長したということよりも、知らず知らずのうちに周りに助けられて過ごしていると思いました。本学の建学の精神にはしなやかな精神的骨格を持った、個性ある大学として、時流や利害に流されない独立した人格を学生のうちに育てたいという願いが込められています。そんな建学の精神に則した温かい人が集まる北星学園がこれからもたくさんの生徒・学生の学び場であるよう、職員として励んでいきたいと改めて思いました。また、私は来年度で社会人四年目になります。生きていたら思いがけずにつらい思いをして生きる希望や働く意味を考え出すことがあると思います。他者からすると些細な出来事でも自分にとっては大きい出来事な時もあります。時間が解決することだったとしても辛い時は辛いです。でもそんな時に氣にかけてくれたり、和ませようとしてくれ

る周りの人たちがいます。そんな周りに感謝しながら、いつか回復したときには恩を返せるような余裕のある社会人四年目を目指していきます。

(二〇二二年十一月七日)